

くらかけさんろく 鞍掛山麓千枚田保存会（愛知県新城市）

棚田と里山が育む生物多様性

▶ 背景

愛知県新城市北部に位置する四谷地区は、標高883mの鞍掛山麓の南西部に広がる四谷の千枚田とその周りを囲む50戸ほどで形成されている。かつて千枚田は1,296枚の田を有していたが、経済成長に伴う都市部への人口流出により、平成元年には田の数は373枚まで減少した。

こうした状況の中、これ以上の農地減少を防ぎ、「日本の三大石積み棚田」と称される美しい景観を守るため、都市住民との交流による棚田の保全活動を通じて、農業労働力の確保や集落の活性化を図ることを目的として、平成9年に「鞍掛山麓千枚田保存会」（以下「保存会」）を設立した。



▶ 取組概要

保存会が中心となり、平成12年に四谷集落協定を締結。中山間地域等直接支払制度を活用して年5回行う草刈り等の作業には、毎回二十数名が参加し棚田の景観環境の整備を行っている。また、耕作者の収入確保の手段として、千枚田で生産した米（ミネアサヒ）を株式会社丸八製菓（愛知県豊橋市）へ出荷し、「千枚田五平餅」を製品化。地域特産品として、東三河地域郵便局の「ふるさと小包」、道の駅「もっくる新城」、ネットショッピング等で販売し好評を博している。

イベントへの協力等を通じて他組織との関係を徐々に深め、千枚田保全のための連携関係を構築した。地元の小学校、専門学校や企業が行う農業体験学習や研修を通じて食育や社員教育に貢献している。平成18年からは、横浜ゴム株式会社新城工場の社員研修やボランティア活動に協力。同社は、平成24年から四谷の千枚田全域を調査地点にした生物多様性調査を行っており、平成26年には2か所のビオトープを造成し、外来生物の除去等の活動を継続している。

自然豊かな景観と生物多様性に富んだ四谷の千枚田は、平成22年に名古屋市で開催した「生物多様性条約第10回締約国会議」（COP10）の誘致にも貢献。会議翌日のエクスカージョンでは14カ国21名が視察に訪れた。その後も、世界各国の農学研究者等が視察に訪れており、国際協力機構（JICA）の現地研修会も行われている。

棚田では、都市住民との交流イベントとして、毎年6月第1土曜日には「お田植感謝のタベ」を、12月第2日曜日には「収穫感謝祭」を開催。農道沿いに1,500本のロウソクを灯したり、つきたての餅やシシ鍋の提供、アマチュアミュージシャンによる天空のコンサートなど様々な催しが行われており、これらは地域ぐるみの行事として定着。今では、年間約2万人もの人たちが「癒し」と「古き良き日本の原風景」に会える場所として訪れ、新城市及び愛知県の顔と謳われるまでに至っている。

▶ 今後の展開

先人たちから引き継いだ四谷の千枚田の素晴らしい景観と自然環境を守るため、都市近郊から来る関係人口と協力し、様々な活動に取り組みながら未来へ繋いでいく。

▶ 写真で見る団体の取り組み



高低差200mを誇る四谷の千枚田



地元小学生の稲作体験



1500本のロウソクが灯る
お田植感謝のタベ



千枚田五平餅



COP10でのエクスカージョン



国際協力機構（JICA）の現地研修会